

歴代日本銀行総裁小史

第三回

第三代総裁 川田小一郎

かわだ こいちろう



【総裁任期】

明治22年(1889)9月3日～明治29年(1896)11月7日

「日本銀行総裁」と聞いて、どのようなイメージをお持ちでしょうか？
このコーナーでは、歴代総裁の生涯をたどりつつ、総裁在任時に取り組んだ事跡や当時の日本銀行の歴史などをご紹介していきます。今回は第三代総裁の川田小一郎と第四代総裁の岩崎彌之助です。

川田小一郎は、天保七年（一八三六）に土佐藩（現在の高知県）に生まれました。経済に明るく、若くして藩の会計方に登用されたほか、藩命により、藩営商社・土佐商会の経営にもあたりました。

明治四年（一八七一）、土佐商会から改称した九十九商会の幹部として、経営者の岩崎彌太郎や彌之助を補佐し、後の三菱財閥の基礎を固めるなど、実業界で大



土佐商会の長崎出張所跡地に建つ「土佐商会跡」の石碑（長崎県長崎市）。

（写真提供：長崎県観光連盟）

いに手腕を發揮しました。明治二十二年（一八八九）、第二代日本銀行総裁富田鐵之助の辞職に伴い、当時の松方正義大蔵大臣（現在の財務大臣）の推薦により、川田が第三代総裁に就任します。

総裁就任直後、日本で初めての経済恐慌が起こります。これは、一八八〇年代の第一次産業革命時、盛んに設立された株式会社があまく機能せず、倒産が増えたことによるものでした。それに対応すべく、川田は民間への貸し出しを積極化し世の中に資金を潤沢に供給するなどして、金融機能の維持、中央銀行としての機能の確立に尽力しました。

こうした取り組みのかたわら、支店網の拡充や人材登用など組織の充実に取り組み、日本銀行の発展の基礎を築きます。特に人材面では、山本達雄（第五代日本銀行

総裁）や高橋是清（第七代日本銀行総裁）等を採用しました。高橋是清には建築事務主任として、日本銀行本店本館の建築にあたらせました（明治二十九年（一八九六）二月に現所在地に完工）。

総裁就任直後の明治二十三年（一八九〇）、帝国議会が開設された際には財界代表として貴族院議員にも勅選されます。そのほかにも、明治二十五年（一八九二）に、新設の鉄道会議（注①）議員に、その翌年（一八九三）には、貨幣制度調査会（注②）の委員に就任するなど、多くの公職に就き、活躍しました。こうした長年にわたる功により、川田は民間出身者として初めて男爵を授けられました。

川田は、総裁在任期間中の明治二十九年（一八九六）に急逝しました。享年六〇歳でした。



川田の総裁任期中に日本銀行に採用された山本達雄（第5代総裁／上）、高橋是清（第7代総裁／中）、井上準之助（第9・11代総裁／下）。



「大日本帝国政府日本銀行全景」
日本銀行本店が完成した明治29年（1896）当時の銀行周辺の様子が描かれている錦絵（梅堂国貞＜三代歌川国貞＞作）。（日本銀行金融研究所貨幣博物館所蔵）



参考動画
「日本銀行本店本館」④本店本館の建設に関わった人物たち／川田小一郎・辰野金吾・高橋是清

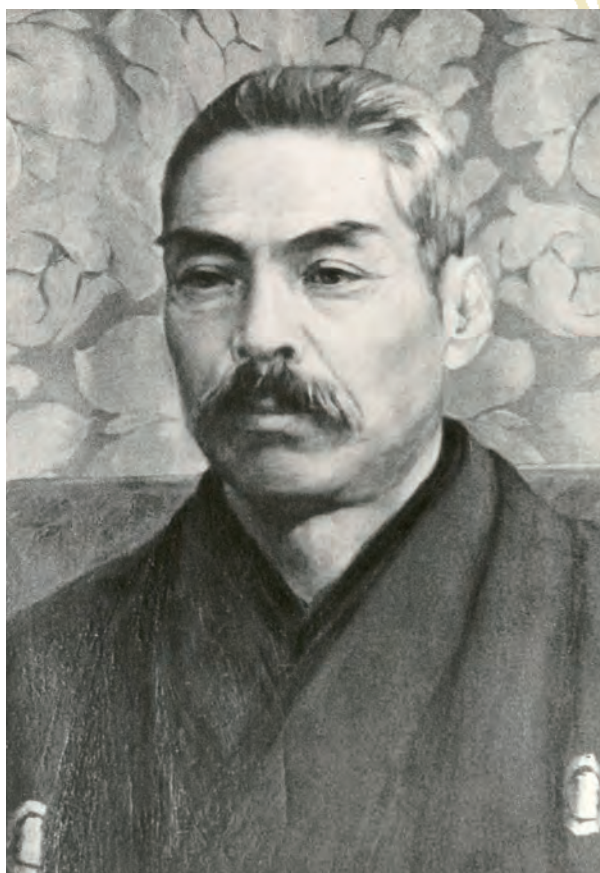
（注①）鉄道会議／鉄道建設の順序や鉄道建設のための公債発行の在り方など鉄道政策を審議するため、鉄道担当官庁に設置された諮問会議。

（注②）貨幣制度調査会／当時の金銀価格の変動やその経済に及ぼす影響、貨幣制度の改正の必要性等を審議するために、当時の渡辺国武大蔵大臣の建議により明治二十六年（一八九三）に設置された機関。

第四代総裁

岩崎彌之助

いわさきやのすけ



【総裁任期】
明治29年(1896)11月11日～明治31年(1898)10月20日

岩崎彌之助は、嘉永四年（一八五二）に土佐藩（現在の高知県）に生まれました。土佐藩校の致道館にて学問に励んだ後、大阪にて歴史学者重野安繹の私塾成達書院にて漢学を学びます。明治五年（一八七二）、

米国に留学しますが、明治六年（一八七三）に帰国し、三菱商会に入社しました。父彌次郎の急逝に際し、兄である同社社長の彌太郎から、自らを支えてほしいとの懇願を受けました。三菱商会では副社長とし

て、主力の海運の増強に加え、鉱山や炭坑の買収などを進めました。彌太郎が没し、彌之助が第二代社長に就任した当初、海運の競争激化等により三菱商会は不振に陥っていました。彌之助は、造船業、保険



岩崎彌之助の生家（高知県安芸市）。彌之助の曾祖父彌次右衛門が1795年ごろ建てたと言われている、建坪約30坪の藁葺きの平屋で、当時の面影をそのまま残している。

（写真提供：一般社団法人安芸市観光協会）

業、不動産業、銀行業と事業の多角化を図りつつ業績を回復させ、三菱財閥の発展の基礎を築きました。こうした実業界での経営手腕を買われ、岩崎は、第三代日本銀行総裁川田小一郎が急逝した明治二十九年（一八九六）十一月に、第四代総裁に就任しました。



致道館は、土佐藩第16代藩主山内豊範の命を受け、藩の参政吉田東洋により文久2年（1862）に建てられた藩校・文武館が前身。幕末の西洋式軍備に対応した人材育成を担った。当時の姿を残す表門（現高知県立武道館の正門）の前には、「致道館 並 陶冶学校址」と書かれた石碑が立っている。（写真提供：高知県立武道館）

総裁就任直後の明治三十年（一八九七）に実施された貨幣制度の改革（注）と軌を一にして、岩崎は金融関連の改革に着手します。当時、日本銀行が決める公定歩合が市中金利とかけ離れていたことから、金利体系の正常化を企図した諸施策を講じました。さらに、外国為替専門銀行であった横



明治時代に築造された岩崎彌之助邸・三菱社の擁壁のれんがを再利用して造られた岩崎彌之助邸跡等の碑（東京都千代田区）。

浜正金銀行との間で協調関係の構築にも努めました。また金融政策の手段でも新たな試みを行います。それまでは金融機関への貸出と金利政策を主な手段としていましたが、市中金融機関から国債を買い上げ、その購入代金を市中金融機関に支払うことによる資金の供給を初めて行い、金融政策手段の多様化を図りました。

このように、新たな取り組みを行ってきた岩崎でしたが、明治三十一年（一八九八）、「病氣激務に耐えざる」という理由で総裁を辞任します。実際には政策を巡る政府との見解相違が辞任の引き金になったとも言われています。

岩崎は、絵画、彫刻、刀剣、茶道具などに明るく、明治期の西欧文化偏重の中で、東洋の文化財の散逸への危機感から、幅広い分野の古美術品を収集したことで知られています。

総裁辞任後、財界の表舞台に立つことを控え、明治四十一年（一九〇八）、その生涯を閉じました。享年五十七歳でした。

（注）具体的には金本位制の採用を指す。金本位制とは、貨幣価値を金に裏付けて表すこと。